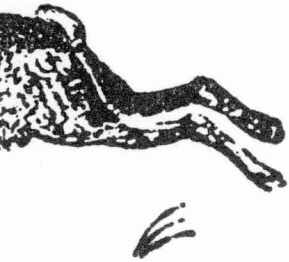
「氷炭」

村松千代

氷炭

村松千代



「小説と詩と評論」叢書9

氷炭

定価一五〇〇円

昭和五十年十月二十日　印刷
昭和五十年十月三十日　発行

著者　村松千代
発行者　淵上祐史
印刷所　東光印刷
製本所　河上製本

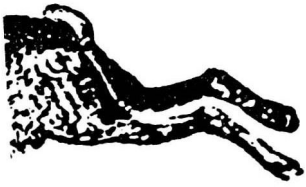
発行所　株式会社　金剛出版
東京都文京区水道一ノ五ノ一六
電話八一五一六四一五（代表）
振替口座・東京三四八四八番

落丁・乱丁はお取替え致します

0093-759011-2354
©1975, Printed in Japan

氷炭

村松千代



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

氷

炭

目次

氷炭　七
蛇足　一三七
廊下の曲り角　二二五
吉見工員寮　二七九

そうてい　真鍋立彦

氷　炭

序　章

その朝康江はまだ薄暗いうちから、麻喜の電話にたたきおこされた。その驚きに加えて、麻喜のただならぬ声の調子と、衝撃的な話の内容にすっかり動顛して、頭から理性を失ってしまったといえる。麻喜は近県のO市に住んでいる。康江は彼女とはもう二十数年会っていない。手紙は時偶もらっていたが、電話はこれがはじめてである。

麻喜は電話の中で絶叫した。

「康あちゃん？　あたしっ、あたしっ、麻喜よ。あたし、娘や孫達にいじめられて死にかけてるのよ。ね、おねがいっ、おねがいっ、きてっ、きてっ！」

あとは身も世もない悲しげなすすり泣きの声にかわった。

「行くわよ行くわよ。しっかりして待っててね。しっかりして！　今すぐ支度して出かけるから」
大変だ！　という思いが走り、康江も思わず声をうわずらせて叫びかえした。旧友を庇うように、しっかりと麻喜を抱きかかえる気持だった。その麻喜は颱風の暴力に今にもなぎ倒されようとしている、花のように美しいかつての麻喜だった。眩いばかりに若々しい顔に、華やかな絹物づくめの和服のさわりがフワフワとやわらかい。
麻喜の返事はなく、なおも地の底をはうような暗い泣き声はつづく。
「聞いてるの？　麻喜さん」
「……」
「どうしたの、麻喜さん！　麻喜さん、麻喜さん麻喜さんっ」
加速度的に切迫していく康江の叫び声は、いきなり受話器をおく音に断ちきられた。
一瞬、茫然となった。体が小きざみに震えている。康江は息づまる思いでO市いきの支度をはじめた。今日も朝からの暑さで汗びっしょりになり、たださえ穿きにくい足袋を、左右はき違えたり、伊達巻きをしめ忘れたりした。
気をもむために、かえって支度に手間どっているうちに、康江はようやく麻喜の電話の異常さに気づくと同時に、現在の麻喜の老齢をすっかり考え忘れていた自分に気づくのだったが、それでもまだ麻喜の電話の声が老いていたかどうかを考えかえしてみる余裕もない慌てかただった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

麻喜は死にかけているといった。けれども、瀕死の人間に電話がかけられる筈もないし、まして高声で絶叫できるわけもない。それに麻喜はもう七十歳を遙かにこえている筈である――と思っても康江の持つ麻喜のイメージに、年をとらすことだけはどうしても出来なかった。

康江がつきあっていた頃の麻喜は、もう三十幾つかになっていたが、まだ二十代半ばにもならない康江より遙かに若かった。それから二十年近くたって、戦後、最後にあった時の彼女も、どう見ても歳月の爪あと一つ探しだせない奇蹟的な若さだった。おまけに去年まで、若い娘そこのけの情感にあふれる手紙に、自己流の恋歌を決して添え忘れなかったような彼女である。

康江は麻喜のことを考えると、いつも彼女に対する自分の友情感覚に、負債感にも似た後めたさのつきまとうのを拭いきれないのだった。多少なりともお互いの理解や、共感の厳しさの伴う他の友人達と違い、麻喜には頭から理性の目つぶしをして、まるで狎れあいの男女のように、あばたも靨の低いところで、この年上の友を扱い、戯れるように、彼女との交友をつづけてきたことにである。

麻喜は、康江のかつての雇い主で、戦時中に病死した、英国人の日本語学者A・R・ウイリアムの未亡人である。

康江は重病から死線を越えたばかりの、夫の桂木彰の予後を養うために、二年ほどO市の海岸ちかくに住むウイリアム邸に通って、外人向きの簡単な日本語研究書の著述の手伝いをして

働いたことがあるが、そんな関係で麻喜とは知り合ったのである。

若さの情熱から、周囲の反対を押しきった無謀な半病人との結婚だった。康江は悲境に結ばれたお互いの愛の絆の強靱さを疑わず、最悪の条件からの出発のコースに、建設の希望以外には抱かなかったが、二人の結婚は、出発と同時に破壊作用がはじまっていた。康江はどん底の苦しみを味わったその暗黒時代を、麻喜との交友に慰められたところが多い。

ウイリアムは日本ずきの資産家で、日本に骨を埋めるつもりで豪荘な邸宅を建てて住んでいた。麻喜は深窓の洋妻として、他とのつきあいもなく、さりとて勝手な外出も夫に許されず退屈しきっていた。美しい丸顔と共に、異常なまでに気の若い、可愛らしいタイプの女だった。最初からペッタリのつきかたで、年下の康江を慕ってきた。康江もまるで、中毒患者が苦しい胸を掻きむしりながら麻薬をもとめるように、たえず麻喜に心を惹かれていた。

麻喜は夫が外出さえすれば、必ずウイリアムの書斎で仕事中の康江のところに喋りにきた。彼女の話といえばきまって、貧しい舟大工の一人娘として生まれ、十代で両親を失って以来、水商売関係を転々としながら、三十を過ぎてからウイリアムを獲得するまでの、数知れない恋愛と、三回にわたる男との同棲生活経験談のくりかえしだったが、彼女の自由奔放、天衣無縫の生きかたは、康江の凍てついた血をあたため、さまざまの観念の殻をやぶって彼女を人間本来の素肌の世界に息づかせてくれるのだった。康江は自分に責任のないこのレジャータイムの

延長をねがい、麻喜の饒舌の中断をおそれて、二号さんに脂下がる旦那のような無責任な讃嘆で、麻喜の饒舌をあおったものである。

康江が東京に引きあげて間もなく、彰と別れ、部屋借りをして、昔の文学少女時代にかえったつもりで、机に向いはじめたばかりの頃だった。思いがけもなく麻喜が、最近出来た恋人だという二十四五の男を連れて、彼女の独居に現われた。ウイリアムには康江を訪ねるという口実で、外出を許されて来たというのである。麻喜は男が階下のトイレにたつや否や、さも秘密らしく康江にからだをすりよせてきてささやいた。

「ほら、知ってるでしょう、家の前に交番のあったの。あの男、あの交番のおまわりなのよ。フフ！　だけどあたし、あなたが彰さんと別れると知ってたら、あんなケチなやつになんか、チョッカイ出すんじゃなかったわ。今だからいうけど、あたしよく邸を抜けだして、彰さんと一緒にあちこち歩きまわったものよ。でもあなたが何も知らないで、パパの書斎で苦労してると思うと悪くって、彼氏にはキス一つ許さなかったわよ。ほんとうはあたし、彰さんを猛烈に愛してたんだけど……」

ふと、康江の目に古びたフィルムの一駒が流れた。

勤め帰りの康江が夕闇に次第に濃くぬりこめられながら、空の弁当箱とすき焼きの材料のはいった紙包みを抱えたまま、漁家の間借りの部屋の一隅をみつめてジッと立ちつくしている。

そこには彰がぬぎすてた洗い晒しの紺絣のふだん着が、黒い小熊がうずくまったように、コンモリと盛りあがっている。

砂を掃くような絶え間ない潮騒の音が晩秋の夕冷えと共に、彼女の胸に青白い不安をかきたてる。いきなり縁側の障子がひらき、彰が黙ってはいってくると、ぬぎすてた着物のほうへ歩きながら咎めるようにひと言いった。

「めしの支度はしないつもりなのか」

「あ、すぐはじめるわ」

康江は思い出したように、頭の上の裸電灯をつけると、彰の血の気のひいた顔と、疲れを見せてしぼんだ胸許に刺すような視線を走らせて、母家と共用の台所に行った。彼女の目に、彰が着ていた焦茶のセルの色が胸苦しく焼きついている。外出着を持たない彼のために、彼女の母が反物を買って仕立ててくれたものである。

康江がいきなり庖丁の手を休めて、棒を呑んだように緊張した。近頃すっかり忘れていた彰のかすれた咳が聞こえてくる。咳がおさまると、蹴とばすような痰を切る音がした。彰が口中にたまったものを懐紙にとる姿がうかぶ。康江は思わず目をとじて祈る気持になる。その目に長い十本の指が、脅えた緩慢さで懐紙を開いていく。

「アッ！」

康江は震えあがる。半透明の粘液にまじって、真赤な糸屑のような線が眼中に散ったのである。
「ね、さっきのもの異常なかった？」
康江があかずの間の扉をこじあけるような努力で、夕食中の重い沈黙をやぶる。
彰は答えない。
「赤いものまじってなかった？」
やっぱり答えない。
「ね、どうだったの、聞かしてくれたっていいじゃないの、心配してるんだもの……」
「よしてくれ、心配の押し売りはもうたくさんだよ」
黒いタワシのような塊が、康江の胸にクイとひっかかる。
康江は脂汗の出る思いで、なおも一押しおす。
「ね、散歩もいいけど、おねがいだから日のあるうちに帰ってよ。もしまたぶりかえしでもしたら、元も子もなくなるじゃないの」
彰の色の薄い唇がかすかにゆがむ。
「君の苦労がか！」
（アワワワワ…）康江は突然、声のない叫び声をあげて彰の声を蹴ちらすと、眩いばかりの現実にかえり、思わずはしゃいだ調子で、目の前の麻喜をからかった。

「惜しいことをしたわね、私も知ってれば、彼氏に熨斗をつけて進呈したところなのに……」
相手が麻喜なればこその、そんな真面目さを欠いた軽口も、その後の康江には、思い出せばヒヤリとするほど厭らしく、自分の若い頃の、悔いと負い目になっている。節操の点では妻と五十歩百歩のウイリアムだったにしろ、一度は窮地を救われたこともある彼の面から、麻喜の裏切りを考えてもみなかった自分への反省もあった。
ウイリアムとの間に子供のなかった麻喜が妊娠した。おまわりさんのものと思うよりなかった。隠しきれなくなってウイリアムに打ちあけて、彼を激怒させ、狂乱させたことは、その後の麻喜の手紙で知れた。
結局、ウイリアムが譲歩して表通りの屋敷の隅に写真館をたて、技師を雇い入れて男に経営をまかせ、恋人同士をそこに住まわせることになったがそれも昼間だけで、夜は麻喜は夫の許に、男は下宿に帰らせるという、きびしい条件つきだった。その頃の麻喜の欲求不満の手紙も、康江は幾通かもらっている。
長女の衿子が生まれて三年目に、男はさっぱりはやらない写真館と、麻喜母娘をすてて蒸発してしまった。
父親に代って衿子を盲愛したウイリアムは、O市が空襲をうける前に死んだ。
「会いたいわ、会いたいわ、話したいことが山ほどあるのよ。ね、一度きてよ。お願い！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.